いまから話すことは完全に後付けですけれども、そのときに本当に炉心溶融が起こったりメルトダウンしているという認識が東電側にあれば、逆になぜ総理の視察を受け入れたのだという議論も成り立つのです。だって、私たちはそんなことはわからないですから。

○質問者　拒否できる人たちかみたい点もありますけれどもね。

○福山前副長官　それはそうなんですけれどもね。[redacted]

○質問者　わかりました。

○福山前副長官　それで問題の注水ですね。

○質問者　はい。

○福山前副長官　問題の注水ですが、6時45分から官房長官の会見に私は同席をします。途中から、このぐらいのときから、総理執務室ではなくて、例の問題の5階応接室になります。執務室の隣。この準備をホワイトボードを始めとして準備をしたというのは私ではありません。これは全部寺田さんと秘書官がやりました。

一方で、私は逆に別の危機管理センターや官房長官と地震のオペレーションもしているので、ここから先はいろんな場面で私は飛び飛びになります。官房長官の会見に同席した後、総理の執務室ではなくて応接室に飛び込みます。そうしたら、例の水を入れる、入れないの議論になっていて、武黒さんから水を入れるのに2時間程度かかるという話がありました。これは水素爆発も含めていろんな機材等が管とかポンプ等が生きているかどうかわからないので、水が海水注入が入るかどうかを全部調べなければいけませんから、その準備に2時間ぐらいかかりますという話がありました。結果として、2時間かかるんだなという話をわっとしているときに、1つは総理から塩水を入れて大丈夫なのかという話がありました。このときには塩水を入れたら固まるのか、何かそんな話が出てまいりました。もう一点は、総理から再臨界はなのかという問題提起がありました。これはまた班目さんからは、はっきりと私には言ってくれたのですけれども、ゼロではないということを言いました。

中間検証は違う表現になっているので私はびっくりしたのですけれども、[redacted]ですから、私には明確にゼロではないということを言って、自分は科学者としてそういうことを言う可能性はあのときにはあったということは言ってくれました。

一方で、細野さんが5月ぐらいのあのときに班目さんともめたのは、可能性があると班目さんが言ったと細野さんが会見で言ったので、班目さんは怒ったのです。そんなことは学者の端くれとして言うわけがないと言って怒ったのです。私はでも班目さんゼロではないみたいなことはよく言われていましたよねと言ったら、それは言ったかもしれないと私に認められて、その後、私はびっくりしたことを言われたのですけれども、自分が言うゼロではないということは、それは科学的にはほとんどゼロに等しいのだと、自分の心の中ではと私におっしゃったのです。そんなこと言っても、原子力安全委員会の委員長にゼロ

ではないと言われたら、素人の私たちはあるかもしれないと思いますよねと言ったら、そんなこと言っても科学者としての自分はゼロではないというのはほとんどないに等しいんだ、心の中、頭の中ではそういうことだと言われて、私は閉口したのですけれども、逆に検証委員会の表現は違う表現になっているので、確かにゼロではないようなたぐいの表現をされました。

私ははっきり覚えているのですけれども、2時間準備にかかるのだったら、その間に安全委員会の方で再臨界の可能性はないのかどうかをちゃんと調べておいてくれと総理は言われたのです。わかりましたという話があって、それで実はでは2時間後に結果を持って集まりましょうと言って散会したのです。でも、そのときにはまだ水素爆発の状況はわかりません。実態として申し上げれば、東電の武黒さんが慮ってやめろとか、吉田さんがそれを無視して入れたとか何とかというのは、私たちは全くいずれにしろ知りません。これも話は私は個人的にはあちこち変わっていると思っているのですけれども、例のTBSや読売の報道が出てから随分実は中身も変わっていると思うのですけれども、検証委員会はお持ちかもしれませんが私は幾ら探してもなかったのですけれども、最初のクロノロジーは試験注水になっているのです。最近のクロノロジーは試験注水の「試験」というのは消えているのです。

私は実態はわかりません。東電内部の実態は何が本当か全くわからないので、そこは変に邪推をして申し上げるのはよくないと思いますので、少なくとも総理が注水を止めろと言ったことはありません。ただし、総理は再臨界と塩水で大丈夫なのかということは確認されました。2時間かかるのだったらその間に確認をしてくれと言って散会しました。7時 36 分、当時の細野補佐官が東電と連絡を取って来られました。これが当時、今度は総理の執務室です。執務室に補佐官が入ってこられたときの私のメモです。

モニタリングカーで14時、15時とあって、15時36分、水素爆発が起きます。モニタリングカーは14時と書いてあって、15時36分は水素爆発です。46分に860、たぶんmSvだと思いますが、こうやって落ちていきます。細野さんはここで総理に、もし格納容器の爆発ならどんどん線量は上がっているはずなのですけれども、ここで落ちているので、実は建屋の爆発ですと、水素爆発だと思いますということをやっと初めてここで細野さんから報告があります。その後、細野さんから、ポンプ動きます、管生きていますと、制御棒は臨界を未然に防ぐので入っていますから大丈夫ですという報告があります。20時までに確認をもう一回して、ゴーサインをしましょうという話が細野さんから7時 36 分です。なぜ7時36分かというと、私の秘書官のノートには7時36分と書いてある。7時46分か36分です。

○質問者　ここのページはコピーを取らせてもらってよろしいですか。

○福山前副長官　いいです。

私たちはこれで初めてポンプが動いて管が生きているので、水が入るということを確認できたので、なおかつ再臨界の話も防げるということも報告を受けたので、では水を入れ

ましょうと言って20時20分か何かに水を入れろという注水指示を正式に出すことになります。その間、入っていたか、入っていないかなどというのは我々は知ったこっちゃありません。だから、当時の東電のあれがどうあろうが、そこは私は知ったこっちゃないのですけれども、少なくともその状況が現実には私の記憶の中ではそういう状況でこのときの対応があります。

○質問者　この注水の関係で3点ほどお伺いしたいのですけれども、中間報告にも書かせていただいた部分で、水素爆発によって一部組み立てた注水ラインが現場においてどうも吹き飛んでいるようなのです。そういうことが具体的に起こっているというような情報というのは東電からもたらされたのですか。

○福山前副長官　勿論、水素爆発で現場がぐちゃぐちゃだから、だからこそ管が生きているかポンプが動くかわからないから時間をくれという話でした。結果として実は中間報告でも気になった表記があって、武黒さんが指示を受けたみたいな評価になっていますね。3つあって3つ1、2、3と書いてあるのです。あれを武黒さんが指示を受けたと書いてありますが、逆です。こういうことをしなければいけないので時間がかかるので1時間半かかりますというのが向こう側からのプレゼンです。それはしようがないねと、早く水を入れなければいけないのだから、海水でも何でも入れなければいけないのだから、早くそのことを確認してくれと。ただし、再臨界はないのかという話と、塩水を入れて大丈夫なのかということを確認して、ではどうせ準備にかかるのだったら1時間半後に戻ってきてねと言ったら、そのときには2回目のときには、実は班目委員長は来ませんでした。

委員長代理はだれでしたか。

○質問者　久木田さん。

○福山前副長官　久木田先生が来られてここに書いてあるように、制御棒が臨界を未然に防ぐので大丈夫ですという、再臨界はありませんという話が実はあって、細野さんからまず水素爆発で放射線量が落ちていますという、建屋ですということと、管が生きていて水が入りますから、水を入れられますという報告を行って、では入れようといって用意ドンしたのが現実に8時20分です。

○質問者　わかりました。この点に関してもう一点、保安院から出てきている時系列のなかで17時55分くらいに海江田大臣が既に海水注入をすべしという指示を出されているのですけれども、そういった指示が既に出ていることについてね、官邸の5階で情報が共有されていたとかそういうことは記憶にございますか。

○福山前副長官　ここが私は実はわからないところで、正直言ってわからないのですけれども、私は先ほど申し上げたように 17 時 45 分から官房長官会見に同席しています。17 時 55 分は正直言って実は私にとってはエアポケットみたいな時間なのです。水を入れろという指示を出したから管とかの対応をしなければいけないので1時間半かかりますと武黒さんが答えたのか、海水注入するしかありませんと、もう淡水はなくなりましたと、水素爆発は起こったけれども、水を入れ続けなければいけないのでやりますからというとき

に、実は後付けで経産大臣の指示を付けたのか、ここは済みません、私はわかりません。ただ、総理の注水を中断した指示みたいな話が後で出てきたことは、私にとっては大変そこは不信感を持っていて、海江田大臣の指示は出たと思います。紙が残っているはずですから、それは一旦出たんだと思いますが、後で総理がやめろと言ったみたいな話というのは完全に意図的につくられた話だと思っています。

○質問者　そうしますと、5階の雰囲気というのは、もう海水を入れるしかないので総理に報告に行くという形なのか、そもそも海水を入れるべきか否かについて総理に御判断を仰ぐ。

○福山前副長官　違う。海水を入れると、入れなければしようがないですねという話の中で総理から大丈夫かという確認のあれが来たということです。

○質問者　わかりました。

○福山前副長官　もう入れること前提です。ただ、入れろと言っても、東電から何が返ってきているかというと、入れたいのですけれども、入られるかどうかわかりませんと、それは管が生きているかどうか確認しなければいけないし、ポンプが動くかどうか確認しなければいけないし、爆発の後の状況がありますので時間がかかります、2時間ぐらいかかりますと言われたので、ではこれとこれはどうだと。そんなことは私たちは発想しないのですけれども、総理は逆に言うと再臨界は大丈夫なのかと、塩水は大丈夫なのかと逆に確認されたら、では、その部分はちゃんと調べて連絡します、どうせ準備に時間がかかりますから一緒にと言われたのが実態です。だから、例の7時何分でしたか、46分か何かに水を入れてそのまま入れ続けたりとか入れ続けないとか、全く私たちはあずかり知らないです。特に武黒さんがやめろと言ったとか言わないとかやりとりがあったとかというのは、全く私たちは知らないです。

○質問者　わかりました。この点に関しては最後なのですけれども、班目委員長から久木田代理に代わられたということなのですが、委員長は物理的に官邸から出られたのですか。まだ議論が収束していない中で委員長自身がいなくなるというのは。

○福山前副長官　班目委員長がどこに物理的に消えられたかまでは私たちは到底把握できないですけれども、その場では久木田さんが来られたことだけは間違いないです。

○質問者　わかりました。

○質問者　印象としては、班目さんがいなくなったということについてすごく印象に残っているということですか。

○福山前副長官　印象に残っているというか、久木田さんが来て淡々と報告されたので、多分そのときは再臨界も起こらないし大丈夫だからもうその程度だったら久木田さんが代わりに来たのだなぐらいにしか私たちは思っていないです。そこはそんなに悪意で取っているわけではないです。

○質問者　吉田さんが本社、社長から電話がかかってきて水を止めろと言われて、これはだれが言っているのだということを官邸筋からの絶対命令だと社長から聞いたとか、そう

いうことを吉田さんが言っているのですけれども、それは東電内部の問題だから。
○福山前副長官　東電内部の問題です。
○質問者　社長がなぜそういう言い方をしたのかよくわかりませんけれども。
○福山前副長官　つまり、余り私は検証委員会の皆さんに先入観とかを与えてはいけないかなと思っているのですけれども、この注水の話は後からつくられた事実は結構あると思っていて、それ以外も含めて後からつくられた事実というのは、私は幾つかあるなという感じをしないでもあります。しかし、あそこはそれはそういうところですからしようがないかなと思っています。
　だから、逆に言うと、最後に申し上げようと思ったのですけれども、その場時点で起こってきたことと、言葉は悪いのですけれども、後からアリバイ的にでき上がってきたもののすみ分けというのがすごく重要だと思うのです。
　撤退の話もそうなのですけれども、後でまた 14 日の話になると思いますけれどもね。水素爆発はそんな感じです。
○質問者　わかりました。今の再臨界の関係の議論を官邸５階の応接室でされていたときに、ちょうど再臨界の可能性があるのかという話になって、第一原発の避難範囲を拡大させた方がいいのではないかという議論になったと聞いているのですけれども、その避難との関係の部分というのは御記憶はございますか。
○福山前副長官　避難は再臨界ではないでしょうね。水素爆発でしょう。
○質問者　水素爆発が起きて。
○福山前副長官　だって、当時はまだ水素爆発が何かわかっていないのだから。これがチェルノブイリ型の爆発だったらもっと避難させなければいけないのではないですかみたいな議論は出た可能性はあると思いますけれども、再臨界で避難ではないと思います。再臨界が起こるかどうか確認してくださいという話ですから。
○質問者　それで一旦ブレイクになったと。
○福山前副長官　はい。一旦ブレイクします。
○質問者　５時 45 分からの。
○福山前副長官　官房長官会見。
○質問者　５時 40 分でしたか。
○福山前副長官　５時 45 分。
○質問者　５時 45 分でしたか。官房長官記者会見が終わって戻られて、総理の執務室の横の応接室に来られたらこの海水注入の議論があったと。ここには総理もいらっしゃったので、先ほど話をお聞かせいただいたような議論があって、一旦ブレイクになったということですか。
○福山前副長官　そうです。
○質問者　問題は、今ちょっと話が出ました１Ｆの避難の範囲を 10km から 20km に拡大する時間帯は 18 時 25 分、ちょうどこの議論がなされていると時間的に重なっていて、い

ろいろヒアリングで聞いているところによりますと、ちょうどこのブレイクの前辺りに出ているという話のようなのです。その話がまさに 10km から 20km に拡大するという避難の話が出たときに、福山先生はその場、応接室にいらっしゃいましたか。それともそのときにまた外に出られましたか。

○福山前副長官　多分いるでしょう。

○質問者　拡大について、３時半の爆発が原因でしょうと言われましたけれども、どんな議論があったのか、具体的にそのときも先ほどお話が出たように伊藤危機管理監から避難のフィージビリティといいますか、避難場所の確保的な話が出たのかもしれないなと我々は思っているのですけれども、どんな議論がなされたのか御記憶。

○福山前副長官　そのときは私はよくわからないのですけれども、水素爆発があってそれがわからない状況の中で、枝野さんの会見が終わってもまだ水素爆発の状況が見えないわけですね。ですから、そのことも含めてとにかく広げた方がいいのではないかという議論の中でやりましょうという話になったのではないかなと思います。そこは記憶が結構あいまいです。

○質問者　今、ちょっと再臨界と避難の関係について質問をさせていただいたのは、いろいろヒアリングでお聞きした中で、再臨界の可能性が否定できない、班目先生がそういうことをおっしゃっていたと。そうすると、そういう可能性があるのだったら、やはり避難範囲を拡大しなければいけないかという議論もあったのだという話がある方からありまして、なるほどねと、だからこの時間なのかと我々も若干合点がいった。なぜこの時間帯なのか。

○福山前副長官　私の印象は再臨界よりも水素爆発ですね。その議論があったかもしれませんが、水素爆発です。

○質問者　勿論、更に今後何があるかわからないというほかの号機もございますし、そういう話もあるんですか。

○福山前副長官　ただ、総理の剣幕は相当だったのです。再臨界はないのか、再臨界はないのかと、その剣幕で若干危ないのだったら逃がしておかなければいけない、避難してもらわなければいけないと思った印象がある人がいても、それはあり得るかもしれません。私の印象は余りないのです。

○質問者　わかりました。

○質問者　時間がさかのぼってしまうのですが、この第一原発 20km の避難指示になっている注水の議論をする多分前だと思うのですが、5 時 39 分に２Ｆの 10km の避難という、２Ｆが 10km に拡大されているのですけれども、ここはなぜ２Ｆで拡大したのかというところの御記憶というのはございますか。

○福山前副長官　水素爆発です。

○質問者　１Ｆの水素爆発を受けて。

○福山前副長官　１Ｆの水素爆発を受けて、もう１Ｆは 10km を避難しているでしょう。

これは多分２Ｆ、重なるか、もしくは先ほどの２Ｆで同様のことが起こりうるかもしれないみたいな話と多分両方だと思います。だから、私は正直申し上げて記憶が定かではないのですけれども、どちらがプライオリティが高かったか記憶はないのですが、２Ｆで３km にやったときは 15 条通報で先ほどまさに確認させていただいたように、より同じような事象が起こるかもしれないからという話でしょう。今度、水素爆発が現実に３時 54 分に起こって、現実に水素爆発の状況がわからない中で２Ｆはこの水素爆発に対する避難と、２Ｆのある種の同様のことが起こるかもしれない蓋然性が高まっているのではないかということの多分両方です。ただ、どちらのプライオリティが高かったかはわかりません。

○質問者　実はこの時間帯の２Ｆのプラントの状況を見ますと、特別大きな変異がなくて、なぜこの時期なのだろうねと。

○福山前副長官　[redacted]水素爆発です。

○質問者　そうすると、逆に言うと、この 18 時 25 分に１Ｆから 20km に拡大してほとんど２Ｆからの 10km がそこに含まれてしまっている関係になるのです。

○福山前副長官　すごいよくわかります。その議論をしました。絵の描いてある地図はあります。若干はみ出るところが、これは８km、10km でしょう。

○質問者　そうですね。10km ちょっとですのでここがはみ出るのです。

○福山前副長官　ここの広野町のはみ出るところが大問題になったのです。

○質問者　そのときではなくて後にですか。

○福山前副長官　後で大問題になるのです。この広野町の出っ張りをどうするかという議論が大問題になるのです。ここに実は高速道路のインターか何かがあるはずです。Ｊヴィレッジもこの辺にあるのではないですか。

○質問者　そうです。

○福山前副長官　つまり、そこが避難箇所のときには大問題に将来的にはなります。しかし、私たちの場合には、先ほど申し上げたようにとにかく被曝させたくないという思いが一番なので。

○質問者　逆に言うと１Ｆの爆発が主たる理由でしょうから、我々もそうだろうなとは思っていたのですけれども、今日お話を聞いていてほぼそういう線なのだろうなと確信しているのですが、逆に１Ｆの方の 20km は先に出てしまっていたら、この２Ｆの 10km というのはなくてもよかったかもしれないですね。

○福山前副長官　かもしれません。それはもうわかりません。

○質問者　たらればの話ですからやってもしようがないのですが。

○福山前副長官　結果としては同じことですからね。

○質問者　はみ出た部分の問題が出ないで。

○福山前副長官　将来は出てきました。先行きには出てきました。

○質問者　出ないで済んだという話ですけれども。

○福山前副長官　でも、それは後の話です。

○質問者　そうですね。わかりました。ありがとうございます。
○質問者　それともう一つなのですが、今までヒアリングしている中で出てきた話として、２Ｆも20kmに拡大すべきなのではないかという議論が出たと一部聞いているのですけれども、２Ｆを20kmにという話が出た御記憶というのはございますか。
○福山前副長官　余りないです。
○質問者　それはないですか。
○福山前副長官　はい。出たかもしれないですけれども、余り私の中で優先順位が高くないので余り残っていないです。
　そろそろ３号機の爆発ですか。
○質問者　お願いします。
　福山先生、休憩はどのようにいたしましょうか。一旦。
○質問者　今、ちょうど2時間ぐらいです。
○福山前副長官　済みません、私がしゃべりすぎてごめんなさい。
○質問者　いいえ、ありがとうございます。
○質問者　御予定は大丈夫ですか。
○福山前副長官　５時半まではちゃんと取っています。
○質問者　今後残りは。
○福山前副長官　６時ぐらいまでは大丈夫だと思います。延びる想定をしておりましたから。
○質問者　では、休憩に。

（休　　憩）

○質問者　そうしましたら、14日の３号機の爆発の辺りから東電の撤退ですとか、統合対策本部に至る部分の話をいただければと思います。
○福山前副長官　14日の３号機は、多分夜中明けていろいろとトラブっていたのです。ところが、余り記憶になくて、なぜかというと 13 日になって私たちは水素爆発の状況と水を入れるという状況をつくって 12 日の夜に避難の記者会見をしているはずなのですけれども、明けて13日は８時39分に細野・吉田会談というのが書いてあるのです。
○質問者　午後、午前ですか。
○福山前副長官　当然午前中です。９時、電源につながらない、メルトダウンの可能性、水素爆発が９時になっています。３号機の水素爆発は何時でしたか。11時何分ですね。午前中ですよね。
○質問者　午前中です。
○福山前副長官　圧力容器減圧するとか、バッテリーが２時間ぐらいだとか結構書いているのですけれども、この辺でトラブっているのは何となくノートには雰囲気があるのです。

○質問者　それは3月の。

○福山前副長官　勿論、13日の朝です。9時10分にバルブが開いて圧が下がったとか、注水したとか、いろいろ書いてあるのです。ということは、このぐらいには相当緊張感が走っているとは思います。

それで実はこれなのです。多分総理の部屋にいるときに秘書官がこのメモを入れるのです。これは私の字です。これは私の万年筆なのです。これは違う人ですから、水素爆発が起こったというメモが入って11時5分、吉田所長1回のみというのはよくわからないのですけれども、11時15分水素爆発でいろいろ圧の話をずっと書いているのです。

○質問者　爆発後の話ですね。

○福山前副長官　これは爆発後の話だと思うのです。だから、これは報告が入っていますから、多分もう水素爆発の状況は、爆発が来てメモが入ってばっとその状況を聞いているということですから、12日の1号機の爆発よりかは若干すぐには連絡が来ているのだと思うのです。

○質問者　これは官房長官会見の最中ですね。

○福山前副長官　官房長官会見の最中ですか。

○質問者　最中に爆発が起きていたはずです。

○福山前副長官　なるほど。では、私はひょっとしたら官房長官のところに、何となく思い出しました。官房長官は結局このときには水素爆発に言及していないでしょう。

○質問者　その時間帯のときには。

○福山前副長官　していなくて、その直後にするでしょう。済みません、記憶はあいまいですけれども、もう一回しませんか。

○質問者　官房長官は11時40分に一旦格納容器が健全であるという発表をして、1時間後の12時40分に格納容器の健全性は裏付けられたと2回やっています。

○福山前副長官　2回やっていますね。だから、私が実は余り記憶ないのですが、ひょっとすると官房長官の会見と総理の執務室を行ったり来たりしているので、総理とちゃんと会話をしている記憶がないのかもしれないのですけれども、ただメモはこういうのが残っていたので。

○質問者　その際最中に、これは始まったのが10時56分なのですけれども、そこから15分経ったころ、ですから11時10分ぐらいに記者の方から福島第一の3号機の爆発が今あったと情報が入りましたけれども、事前に何かそういう予測があったのかという質問が入っています。

○福山前副長官　入っていますか。それに官房長官は何と答えていますか。

○質問者　「はい。私はこの会見場に来る前の段階で3号機の状況について改めて報告を求めてその情報を持ってまいりました。それに基づいて先ほど御報告いたしましたが、ただいまごらんのとおり、メモが入りましたが、11時5分現在、3号機から煙が出ているという可能性があって」。

○福山前副長官　そのメモを入れているのは多分私なのでしょうね。
○質問者　「爆発の起こった、あるいは爆発のおそれがあるのではないかということで、事実関係を確認中でございます」。
○福山前副長官　ですね。それでもう一回やっているのですよね。
○質問者　次は、11時40分です。
○福山前副長官　そうですね。もう一回やっていますね。
○質問者　はい。「海水を炉心注入してきたところでございますが、先ほど11時1分、爆発が発生いたしました」というのが11時40分です。
○福山前副長官　私はそのときに多分上下行ったり来たりしていて、結果として官房長官の2回目の会見は多分お付き合いしていると思いますのでどういう状況かわからないのです。
○質問者　これは官房長官に行ったメモというわけではないですか。
○福山前副長官　そうかもしれません。わからないです。
○質問者　だれから回ってきたかもわからないですか。
○福山前副長官　官房長官秘書官だと思います。このレベルで回ってくるとすると、官房長官秘書官で当時で言えば多分警察出身の中村さんか、経産出身の井上さんのどちらかからだと思います。正直言うと、私は実はこの3号機の爆発の前後の記憶は余りないのです。何かほかのことをやっていたのかもしれないのですけれども、実はもう一個変な話で言うと、もう1号機の爆発を経験しているので3号機が水素爆発だとわかった瞬間、ひょっとしたら抜けているかもしれません。そういう感じです。
　ただ、結果として言うと、やはりここは残っていて自分でばっとメモを書いて、それも20μSvと書いてありますから、安否確認ができないということも書いてありますので、注水も含めると書いてありますから、相当それなりの危機感は多分あったと思いますが、そのときにやりとりは何をしていたかというのは実は余り記憶がないのです。多分会見場にいるからだと思います。
[redacted]緊張感はあるのですけれども、[redacted]不思議なことで、だけれども、先ほど官房長官に会見に行きますかと聞いて行きますと言われて、総理がやってもらおうみたいなのは完全に自分が当事者なのでそのときの映像というのはちゃんと残っているのですけれども、このときは実は余り残っていないのです。
○質問者　ちょっと前の日のメモのところに戻るのですが、13日の午前9時13分ごろにバルブが開いてというメモがある。
○福山前副長官　9時10分、バルブが開いた。
○質問者　その部分を見せていただいてもよろしいですか。

○福山前副長官　どうぞ。ここからです。細野・吉田会談でしょう。9時、電源つながらない、メルトダウンの可能性、水素爆発と。圧力容器減圧、バッテリー2時間、AM11時。でも、4m、3mは出ている、これは水だと思うのです。これは多分炉心の話だと思うのです。

○質問者　バルブの話が。

○福山前副長官　ここです。バルブです。

○質問者　バルブも開いた、圧が下がる。70gal、気圧。ありがとうございます。

○質問者　バルブが開いたという説明は。

○福山前副長官　あるのですね。これは説明がない限りは書けないですからね。

○質問者　このときにバルブが開いたのか、炉に穴が開いたのかというのは。

○福山前副長官　それは私たちはわからないです。

○質問者　バルブが開いたという説明があって。

○福山前副長官　ただ、このときもまだ水は残っているという感じなのです。1m水、内と書いてあるのです。

○質問者　わかりました。

○福山前副長官　ちなみに全くメルトダウンという想定はこの時点では1号機も3号機もみんなないですから。

○質問者　13日はさすがにあるのではないですか。

○福山前副長官　いや、メルトダウンは13日もないです。メルトダウンしているかもしれないなというのはある種中村さんの会見とかはありますが、でも、メルトダウンしているという確信的な認識はないです。

○質問者　それについてはまた。

○福山前副長官　また。どうぞ。

○質問者　その後、2号機の状況が悪化してくるというのが夕方くらいからありまして、まさに東電が職員を退避させる、させないという話が出てくるのですけれども、その辺りの流れ、御記憶の範囲。

○福山前副長官　実はもう2号機がかなり状況が悪くなったり、例の圧力が高くて水が入らないとかいろいろありますね。それぞれの号機でそれぞれ出てきたり、4号プールでも温度が上がったりしているはずなのですけれども、その状況は個別のそれぞれの号機の状況について、私は当時も素人なので、実は余りよくわかっていません。ただ、そのときに明快に説明をしてくれたのは安井さんです。安井さんが登場されてから、随分我々の中で雲が晴れました。それまでの説明ではない、ある種の合理的な説明と何がトラブっているのかみたいなことについては、例の総理の隣の応接室で断続的に安井さんに説明をしてもらって、我々としては理解しているというのが13から14。

○質問者　安井さん自身は13日午後ぐらいから。

○福山前副長官　ですよね。それが実態です。

実は 13 日の夜は、私と枝野さんは夜中は基本的に計画停電の対応に追われます。勿論、原発の状況はそれぞれの炉の状況が不安定なのは理解していますが、付きっきりというわけではありません。計画停電がスタートするのは 14 日の朝の 6 時 15 分ぐらいから予定の第 1 弾だと思いますが、夜の 13 日の夜中の 11 時ぐらいに東電の電力需給の担当の副社長と担当者を官邸に呼び付けます。他の政治家の方に今度聞いていただければと思いますが、少なくとも官房長官と私のレベルで言うと、計画停電の発表は唐突に発表されました。これだけ炉の状況でひっくり返り電源車の手配をし、水素爆発を起こしている状況にもかかわらず、あの計画停電の発表は私は一切知りません。恐らく枝野さんも知らなかったと思います。

発表されてから我々はどたばたしましたが、表で発表されてしまったものはしようがないのでやらざるを得ないという状況の中で、13 日の夕方ぐらいからトラブルが起こり得るかもしれないということが厚労省から入ってきます。これは狭心症の方が自力のバッテリーで、充電型のバッテリーで在宅のケアをしている。この人が東電の計画停電をやるという所管内に少なからずいる。人数はよくわからなかったのですけれども、状況によっては 1,000 人ぐらいだと言われていました。

これが停電が起こると、本人は知らないで充電バッテリーが切れると命に関わるという話が夕方ぐらいから厚労省から入ってきて、厚労省としては何とかしたいと、ケアセンターを通じて何とかしたいけれども、ケアセンターが土日の日曜日でやっていない。何とか徹夜して連絡を取りたいと思うけれども、全員は不可能だという話が入ってきて、済みません、枝野さんにはあったかどうかわかりませんが、私の心の中には、この状況で勝手に計画停電など発表しやがってというのは実はあって、これはどうしようと思って何とか計画停電をずらせないかということを枝野さんと相談しました。厚労省側からは、朝の 6 時 15 分から始まる計画停電が午前中だけ時間をいただければ何とか午前中、ケアマネージャーのところへ走り回らせて狭心症の人の在宅ケアのところに走り込むからという答えを厚労省がくれていたので、11 時に官房長官の部屋に担当副社長を呼んで、何とかできないかということを強く求めました。

当然、当時は電力の需要が低下をしていますし、JR 東日本等も間引いて運転だとかということをやってくれているので、本当にあんたたちの需給環境は大丈夫なのかと言ったら、もういっぱいで計画停電しないと無理ですと言うから、そんなこと言っても 2 日前から電力需給は落ちているだろうと、なおかつ大口の顧客がいるはずだと、その大口の顧客に何とか協力をしてもらって何割か間引いて電力の使用を節減するような状況を説得してくれと言ったら、彼らは電力需給の表も持たず、ただ単に手ぶらで来て、挙句の果てには私のその言葉に、大口の顧客はお客様ですから、電力使用量を減らしてくれなどとは我々からは言えませんと言ったもので、今度は枝野さんが切れて、もし本当に人が亡くなったら東電は殺人罪だと、未必の故意だと、私は 1 人でも死んだら私の名で告発すると枝野さんがどなって、そこに私が、ではとにかく 3 時まで大口の顧客も含めて交渉してこいと、

本当に電力需給がぎりぎりなのかどうかをちゃんと数字を持ってこいと言って、3時に帰ってきてくれと言って、[redacted]1時に来られた2人を3時に帰しますという話になって、実はこの夜中は私と枝野さんはそこにかかりっきりでした。

3時に副社長が帰ってきたら、それぞれの大口に連絡をしましたとか、どこどこに協力をしていただいて精査をしたところ、計画停電は半日は実施しないで何とかなりそうですと[redacted]言っていまして、わかったと、ただし、1回発表したものをやらないというと今度政府の信頼性に欠けるので、需給関係を考慮した上で実施をしない地域もありますという会見を6時 15 分の手前に無理矢理やりましょうと言って官房長官に6時 15 分の前だったと思いますから、明け方の5時半か5時 45 分だったと思いますが、官房長官に計画停電を実施するけれども、状況によってはしない場所もありますと、変に狭心症のことも言いませんでした。病院が危ないということも言いませんでした。そういう形で実施はせざるを得ないけれども、しないところもあり得ますという形で6時 15 分から実施するはずの計画停電を実施しないで、なんとその日の夕方までもったのです。

それで昼ぐらいになったら、厚労省が大体全部に連絡が付きましたと言って来てくれて、これで命には関わらないなということになって、計画停電についてはそこから先はほぼルーティンで動くのですが、それで混乱したのは、政府は結局やると言ったのをやらないと言って、無理やり電力使わなかったところに迷惑をかけたのどうのこうのと、これも大変だったのですが、裏では実はそういうことをやっていて、13 日の明け方にかけては私と枝野さんはそちらにかかりっきりでした。

だから、質問事項にあった、枝野官房長官の 14 日の朝の会見で3号機の問題について言及がなかったのはなぜですかというと、当然なのです。我々から言うとそのときには、まず計画停電の問題についてのみきちっと伝えようという趣旨だったので、3号炉の状況について明け方の会見で言うのは逆に言うと焦点がぼけるという判断で言わなかったんだと思いますので、そこは明快な理由はあると思います。

これが実際余り報道にはなっていません。一部なっていますが、こんな詳細にはなっていなくて、これは本当に枝野さんと私と東電側の電力需給対策の副社長と担当者と枝野さんの秘書官とうちの秘書官だけでやっていたので、総理にはほとんど事後報告でした。だから、実は3号炉の状況について私の中で余り頭に残っていないのは、13 日はほとんどここにかかっていたからです。

14 日が始まりますね。14 日が始まると、基本的にはそれぞれの状況が先ほど申し上げたように不安定な状況になります。断続的に総理の横の応接室に入って確認をするのですが、余り芳しい状況ではないと。夕方になって安井さんのところで話をしたときに、それぞれの炉の状況について話があったのですが、ごめんなさい、1号機はこうだ、2号機は水がどうのこうの、簡単に言うと圧力が上がっていて、水を入れるにも水が入らないから、圧力を下げるために開けたいのだけれども、それが開かないとか、手動で開けるとか、3号機こうでとか、4号機はこうでということを全部個別にやってもらうのですけれども、

済みませんが自分の記憶に残っている発言は、安井さんとか保安院の人に向かって、安井さんとあと班目委員長かな、東電の人もいたかもしれませんが、こんなアクロバットなオペレーションは持続可能なのですかと聞いたのは覚えています。

それを官房長官も経産大臣も当時は細野補佐官も含めて聞かれていて、大変なオペレーションが同時並行で行われていることは、私らなりには感じていました。ただ、そのときには、もう既に1号機と3号機は爆発しているわけですから、とにかくこれ以上悪くなるのを回避するために作業は頑張ってくれと。東芝とか来出したのはそろそろですか。

○質問者　東芝は13日ぐらいから。

○福山前副長官　だから、13～14日にかけて、そろそろ東芝とか来出すのですけれども、東芝ともう一つ、日立の方が社長とかが来られて、東芝の社長と日立の社長と安井さんが来られて随分炉の状況についての見通しというか全体像が見えてきたというのが実態です。東芝の社長と日立の社長が来られたときは、私は安井さんとともに総理の執務室で最初のレクか何かには入りました。なるほど、こういうことなのかと。Ｊヴィレッジに何らかの形の機材を集めてくれみたいな指示を昼間ですけれども、一生懸命出した記憶があります。

だから、そのころはそういう状況で1日ばたばた計画停電はどうなっているみたいな話で走り回っていて、夕方になって応接室に行くと、それぞれの炉が不安定さが増して、オペレーションがより難しくなっていますみたいな話が出てきていたというのが大体14日の夕方の状況です。

夕方から若干夜にかけてですけれども、ふだんいなかった松永事務次官とかがうろうろし出していまして、なぜ松永さんとか来ているのだと私は思い出しました。正直申し上げると、松永次官も資源エネ庁も当時の細野長官も、全くこの前半戦の2日、3日は官邸に顔を出しませんでした。なぜこの人たちは顔を出さないのだろうと私などは思っていたのですけれども、現実問題としてうろうろし出していて、あちこちで言われていますが、私には東電からの電話はありませんでした。官房長官には一度か二度か、海江田大臣には間違いなく二度、細野さんは電話があったけれども、細野さんは自分は聞く立場ではないと言って電話に出られなかったというのを細野さんから私は聞きました。

私はだれから聞いたか覚えていないのですけれども、枝野官房長官か寺田さんから東電が撤退と言ってきているんだよなという話を聞いて、撤退とは何ですかという会話を寺田さんか枝野さんから聞きました。細野さんには、おいおい、こんなの言ってきているらしいよと私の方から持ちかけたら、細野大臣が当時補佐官ですけれども、私に、私のところにも電話があったのですけれども、私はそんなの聞く立場ではないからと言って断りましたよと、そのときに言われました。撤退とは何だろうねみたいなことをごそごそと枝野さんや細野さんとしゃべっていたというのが私の夕方から夜の状況です。

ところが、大体12時超えて夜中の12時から1時、2時ぐらいになると、その状況が非常に緊迫度を増してきます。それは安井さんの話も含めて、松永さんがうろうろする話も含めて、官邸内というか総理の執務室周辺がざわざわし出してきて、結果として12時過

ぎくらいからだったと思いますが、これは時間はあいまいなのですけれども、延々と断続的に議論します。２時ぐらいにぐちゃぐちゃ汚くなっていたのを片付けたのは後ですね。１時とか２時くらいから、実は総理を抜いて官房長官、海江田大臣、班目さんや安井さん、伊藤さんも含めて炉の状況について再度の説明があって、撤退と言ってきているけれども、どうしようみたいな話を総理を入れないでしました。

○質問者　場所が。

○福山前副長官　応接室。

総理を入れないでして、基本的には安井さんとかが説明をしてくれていて、細野当時補佐官が吉田さんと電話で話したりされているのはそのころかもしれません。電話でやれることはあるかみたいなことを安井さんも言っておられて、結果としてそれが３時前まで続きました。何となく撤退やむなしだなという空気が流れるのを私なりには相当抵抗感があって、撤退はどうなるのだろうというのがあって、伊藤危機管理監が朝日新聞の「プロメテウスの罠」で、東電の担当者と撤退をしたらどうなるんだというときに１号もだめですといって、[redacted]

○質問者　その間、ずっと東電関係者もその会合にいたという。

○福山前副長官　います。

○質問者　それは武黒さん。

○福山前副長官　武黒さんではなくて[redacted]さんかもしれません。ところが、私たちも武黒さんとか[redacted]さんは正直言ってわからないのです。私が官房長官とか大臣にやはりこれは重要ですから総理の判断を仰いだ方がいいのではないでしょうかと言って、そうだねという空気になって総理の判断を仰ぐことになりました。そのときに総理の判断を仰ぐのに、松本防災大臣がいらっしゃらなかったので、松本防災大臣を宿舎まで呼びに行こうと言って電話連絡を松本防災大臣の秘書官に連絡を取りました。松本防災大臣は官邸の裏側の入り口がわからなかったので、では赤坂の宿舎まで迎えに行きますと言って行ったのがうちの秘書なので、間違いありません。

総理を呼ぶ御前会議の前に松本大臣にいていただいた方がいいねということで呼びました。一方で、藤井副長官と瀧野副長官もいてもらった方がいいということで呼びました。実はなぜ藤井副長官をその場で呼んだり瀧野さんを呼んだり松本さんを呼んだかというと、それなりに重たい意思決定だという意識がその場にいたみんなにあったので、自分らだけの判断ではよくないということで結果として藤井さん、松本大臣、瀧野副長官を呼んでやることになりました。

現実に総理は執務室で休んでいただいていたので呼ぼうということで総理を呼んでもらって、総理の執務室に、これは多分海江田、枝野、寺田、福山、細野、政治家だけだと思います。伊藤さんがいたかどうかの記憶は実は定かではありません。現実にはそこの場で総理に私の記憶では枝野さんか海江田さんが東電が撤退と言っているというようなことを伝えたと思います。撤退なんてあり得ないだろうというようなたぐいのことを総理が言

われて、撤退などしたら１号、２号、３号、どうするんだと、燃料プールまであるぞと、あれを放っておいたらどうなるんだみたいな話をされて、それはだめだという話をされて、ほぼ全体のコンセンサスができ上がる中で隣の応接に移動したと私は思っています。

その隣の応接室に移動したら、安井さんや班目さんや武黒さんだか[redacted]さんかは余り覚えていないのですけれども、その人たちがいて、松本大臣だけ遅れて来るのですけれども、副長官とか瀧野さんとかも入った中でどういう状況だと言って、もう一度安井さんからそのことに対する、１、２、３、４に対する説明があります。これが世に言われる御前会議です。だから、その場にいた官僚の皆さんが御前会議だと思っている前に実は政治が一定の意思決定をしています。ただ、世の中に出ている御前会議は、その役人の皆さんが出ているみんながいた御前会議のことを言っていて、そこはいろんな報道その他が混然として混乱している状況はあると思います。

総理は安井さんとかからその状況を聞いて、撤退などあり得ないと、細野さんに、「細野君、東電側に行ってもらえないか」みたいな話が出て、それで清水社長を呼べという話になります。それは法的に行けるかどうかみたいな話を総理は秘書官の山崎さんと経産省秘書官の貞森さんに聞いて、原災法上は何でもできますから大丈夫ですみたいな話になって、ではちょっと清水社長を呼べということになって清水社長が来られるのが４時 15 分くらいだったかな。

○質問者　そのくらいですね。

○福山前副長官　これが大体の顛末です。そのときに一時退避だとか、まず少なくとも退避という言葉はよくわかりません。作業を一部だけ退避しますみたいな話というのは、全く私の頭の中には今の状況では記憶がありません。清水社長が来られるときに、このまま総理は撤退を言わない。総理は清水社長が来られる前に、政治家だけを執務室で集めていろんな話をしていたときに、東電で演説をしたことのベースみたいなことを言われたのです。それは要は１、２、３、４号まで全部ほったらかしたら東北だけではない、福島だけではない、東日本全体がだめになるとか、60 歳以上の人間はみんなで決死隊で行けばいいんだ、状況によっては私ももう子どもをつくる心配もないから、陣頭指揮しなければしようがないかなみたいな話をされたりとか、当時、若い寺田さんとか細野さんに向かって、君たちはまだ先があるからだめだ、それは行けないよみたいな話をされたり、このまま放っておいたら外国が日本に来て原発を処理したら日本は占領されるぞみたいな話をしたり、こんなのはだめだと、何としても撤退などあり得ないと、日本がおかしくなるということを、全然これは感情的ではなく淡々と私たちに話をされて、巷間言われている東電での演説を聞いたときに、あのときの話をもう一回されているなという印象を持っていました。

清水社長が入って来られると言われて、寺田補佐官が迎えに行かれました。私は寺田補佐官に、おいおいと言って、総理は撤退する気ないから、清水さんが撤退とか言ったら大変なことになるよと寺田さんに言ったら、寺田さんが、では、私は迎えに行きますから、清水さんに伝えておきますよと言って迎えに行かれました。東電側は３人で来られたとい

うことは秘書官からその場で聞いていたので３人で入って来るかなと思ったら、そのときすごい印象に残っているのですけれども、清水さんは寺田さんと１人で入って来られました。１人だと思って、応接の構図は皆さん御案内だと思いますが、私が総理だとしたらこちらの席に清水さんが恐縮しながら座られて、総理は大変御苦労いただいている中済みませんがとか、御足労いただいてとか、お越しいただいて済みませんか何かすっと言われて、全然どなっていません。撤退などあり得ませんからと一言ぽっと言われたら、清水さんが「はい、わかりました」と言われて、あんなに撤退と言っていたのになぜこんなあっさり引き下がるのという感じを実はみんな持ったというのが後でみんなの印象を聞いたら思ったということで、実は私もそういう感じを受けました。

私はみんなとちょっと違うのは、さては寺田さん、本当に清水さんに事前に伝えたなと思って、そう実は心の中では思っていました。その後、総理が清水さんに細野君を東電に行ってもらって現地で政府と東電の統合対策室をつくるから、机と部屋を用意してくれと言いました。そのときは清水さんはさすがにちょっとえっとびっくりしたような顔をされて、更に今から行くから準備しておいてくれと言われて、本当に驚いたような顔をされていたのですが、一方でこれは記憶があいまいですけれども、どのぐらいで準備できるかと総理が聞かれたら、これは時間で言われたのか、６時と言われたのか、２時間かかると言われたのか覚えていないのですけれども、聞いた瞬間に総理がそんな時間がかかってしまったらだめだ、もっと早くと言って、30分後か何かに行くからと言って、ではまず細野君を連れて行ってくださいと言って、細野さんと清水さんが出られます。だから、清水さんがいた時間は動静的に言うと10分とか15分ではないですか。すぐだったと思います。

東電に指定をした時間に向かって、海江田さんや総理や私や寺田さんが東電に乗り込むというのが5時半ぐらいだと思います。東電に入ってびっくりしたのは、オペレーションルームが150人か200人ですか、テレビ会議のシステムがあって、こんな大人数でこんな大オペレーションをしているのかというのが入って第一印象でびっくりしました。

こんなことをやってちゃんと現地と連絡が取れているんじゃんと思ったのが私の正直な印象で、一方で、そのときの東電の空気が余りにもぬるいのでびっくりしました。撤退だと言ってきて、いつ爆発するかわからないと思っているのに、ここの空気は緩いぞと思って、私は何度もどなりました。それは怒ってどなったのではなくて、皆さん、済みません、お邪魔しますが、皆さんは皆さんの仕事を続けてくださいと、気にしないで続けてください、皆さんは皆さんの仕事をやってください、どうぞ自分の持ち場にお戻りください、よろしくお願いしますというのを私はどなりながら部屋に入ったのを覚えています。

総理がオペレーションルームで演説という話を勝俣会長から紹介されたのか、清水さんからか忘れましたが、紹介されて総理が演説をしたのが巷間言われている演説です。これはさすがに政治家ですから何百人の前だったので若干力が入った話になりましたが、決してどなっていたわけではありません。言葉的にはこのままで行くと東電もつぶれるぞとか言われましたけれども、別に私は聞いていてこの危機下の状況だからそうだろうなという

ようなことを言われて、実はそのオペレーションルームの小部屋にあいさつの後、誘導されました。

そこで清水さん、勝俣さん、恐らく西澤さん、小森さん。武藤さんは現場にいるからその場にはいないかもしれません。要は[redacted]皆さん役員の方々が相手側に座って、こちらは総理や海江田大臣、細野さん、私がずっと座って状況について聞きました。実はその小さい会議室も福島と刈羽崎か何かがつながっていて、現地で吉田さんとやりとりしている状況を画面で見ていて、そのときに実は当時は爆発音がして、緊急退避させますと言って吉田所長からの了解のアナウンスが来て、当時はサプレッションチェンバー辺りで爆発だ、その辺の音だという話をざわざわと映像で見ながら私たちは、えっ爆発したのみたいな話の中でその様子を見ていたというのが大体6時前後だと思います。

その後、水を入れるだ、注水だみたいな話をしながらここにいつまでもいてもしようがないねということになってオペレーションの邪魔にもなるので一応戻りますと言って総理と私と寺田さんは戻って細野さんは残ったのではないかな。それが大体統合対策室をつくったときの流れです。ちょっと長くなりました。

○質問者　ここで3点ほどございまして、1つが、当時恐らく[redacted]部長であろう方が14日ぐらいから官邸にいらっしゃったと。当時、こういう浮足立ったような状況で東電の職員がいたら、どうなっているんだと非常に強く詰問されて強く印象に残るような感じで思っておるのですけれども、東電の方に対して、例えばだれかが強い調子で状況を確認するとか、そういったやりとり。

○福山前副長官　状況を確認するというのはどの場面でですか。

○質問者　撤退、退避という話が出てきたぐらいでです。

○福山前副長官　状況は先ほど申し上げたように、ずっと14日の夕方ぐらいから安井さんを通じてやっているのです。失礼ながら、[redacted]さんとか当初の寺坂院長とかは私のメモリースイッチからは本当に失礼な話なのですけれども、[redacted]消えているんです。だから、だれかわからないのですけれども、ただ、当時から言うと、安井さんの説明がやはりクリアーなのです。だから、常に安井さんの話を聞きながら、東電にどうなのみたいな話はあります。途中で強めの詰問みたいなものはそんなに強かったと思えないです。どちらかというと何とかしてほしいという感じですね。

○質問者　14日は東電の人間はいましたか。

○福山前副長官　だから、[redacted]さんだと推測するのです。

○質問者　いたとすれば、そういう話ですから安井さん経由であってもそのときにどんな答えをしていたのか。

○福山前副長官　そのころはほとんど東電の人は発言しないです。特に[redacted]さんなどは余計そうです。

○質問者　余り期待していないですか。

○福山前副長官　もう期待していないし、聞いてもいない。だから、安井さんが来て私たちは何と物のわかった人が来たのだろうと思ったのですから、みんな当時は安井さんに聞いたのです。どうぞ。

○質問者　済みません、その後、御前会議という形で総理に退避、撤退の話があるということを伝えられるのですけれども、その際のプレゼンの仕方というのは、一部の話で、今は撤退は許さないということで、菅総理以外のそこにいる人間は意思が固まっているのだけれども、どういったタイミングであれば撤退ができますかというような聞き方をしたと言っている方もいらっしゃるのです。

それとは別に東電が撤退と言っていますが、それは許されますかというような聞き方をしたというような話も一部であるのです。

○福山前副長官　許されますか。

○質問者　東電が撤退したいと言っているということを単純に報告したという方と、今後、事態が悪化したときにどのぐらい事態が悪化すれば撤退やむなしかということについて総理に相談に行ったと言っている方も一部いらっしゃいます。

○福山前副長官　それは御前会議ですか。

○質問者　具体的にどのオケージョンかということもまだきちっと特定できていないのですが、恐らく政治家だけで最初に入られて、少人数である程度の意思決定をされたときかと思います。

○福山前副長官　したけれども、それだけではというので御前会議でいろんな状況を聞いたのです。

○質問者　そのときというのは、どこまでだったら、どういう状況に至れば撤退しなければいけないのかというような話だったのか、東電が今撤退と言ってきているが、これについてどう対処すべきか。

○福山前副長官　後者です。

○質問者　では、具体的には官房長官が総理に対してもう既に東電に対して撤退は許しませんという意思表示はしてありますが、今後どれぐらい状況が悪化すれば退避やむなしと政府として判断しなければいけないでしょうかという相談の仕方をしたとおっしゃっている方がいるのです。

○福山前副長官　当時官房長官は撤退はだめだと電話で言っているはずです。だから、今のところ撤退をしないで作業を続けてくれと言っているけれども、東電側が撤退をしたいと言っているときに、作業員の方の危険がありますから、そのことも含めて要はどういう状況になれば撤退はしようがないですかという聞き方をした可能性はあります。

ただ、私の心の中には、もう10km圏内の避難はしていますね。そうすると、命の危険があるのは作業員だけなのです。当時の作業されている方ばかりなのです。問題はその人たちの命の危険をさらすところをどこまでリスクをぎりぎりまで引っ張れるのかという判断なのです。つまり、わかりやすく言うと、済みません、当時本当にメルトダウンしてい

ると思っていないので、メルトダウンなり爆発なりのリスクはまだ高いと思っているわけです。その状況で10kmはもう避難ができているということは、作業している人が危ないと。その人たちの危険と全体のオペレーションがどういうふうになっていくのかということのぎりぎりのラインまではどこまで引っ張れるのだろうなというのはそれぞれありました。

だから、心の中には一般の住民に関してはもう避難させているんだというのはどこかにはあるわけですむ。その中でのぎりぎりの判断です。先ほど私が申し上げた撤退もやむを得ないかもしれないという雰囲気は若干あるというのはそういうことです。みんな強く意思を持って撤退なんかあり得ないと言っているわけではないのです。だって、作業している人の何百人の命がかかっているのはわかっている。しかし、放っておいたらメルトダウンや爆発が起こったら、10km どころではなくなるというのもわかっている。その中でどう判断するんだという中でみんなどうしようという話をしていたので、今、聞かれたような表現の仕方を官房長官がしていたことはないとは言えないと思います。いろんな雰囲気がみんな揺れましたから。それは総理の判断を仰ごうという話になった。

私は実は御前会議の記憶というのは余りない。なぜかというと、実は総理が撤退などあり得ないということを私たちに伝えて応接室に行くときに、これも本当に情緒的なのですけれども、私の中でははっきり覚えているのですが、総理は撤退させる気はないのだと、一方で作業している方は危ないなと思いながら、私の中では作業はまだ続くんだと思ったのです。だから、若干そこの1号機、2号機、3号機のやりとりはが一が一説明させているのですけれども、撤退はないという結論だけは私の中に応接室の中で入っているので、私の中では実はちょっと作業はまだ続くんだと思っている分だけ緩いのです。総理の政治家同士の応接室よりも私の気分は若干緩くなっているというのは実際ありました。緩いというのは、緊迫感はあるのですが、ただ、撤退をさせるということはもうないんだということに対して言えば、若干気持ち的には撤退はない、作業は続くんだとは思っていたという感じです。

○質問者　これは1点確認なのですが、統合本部を置くという考え方は政治家だけの少人数の方で出てきたのか。

○福山前副長官　応接だと思います。総理が言った。

○質問者　では、少人数ではできてなかったのですか。

○福山前副長官　少人数では出てきてなかったかもしれないです。そこははっきり覚えていないです。わからないです。

○質問者　わかりました。

○質問者　この統合本部に行かれてまた官邸に戻ってきた辺りだと思うのですけれども、この日の11時に20から30の屋内退避の指示というのが出ているのですが、この検討過程というのはどういうふうになっていますか。

○福山前副長官　完全にサプレッションチェンバーが爆発したことと、4号プールで煙が

上がっていませんか。
○質問者　はい。火災のような煙が上がったというものですね。
○福山前副長官　４号プールの煙は私たちは東電で見ているのです。それで、先ほどから何度も申し上げているように、この時点ではまだ爆発のリスクはなくなっているとは思っていないのです。メルトダウンしているとは思っていないのです。ですから、逆にどんどんリスクが高まっている状況はわかりますね。だって、撤退するの、いつどこで東電が手を引くかわからない状態で、片方でサプレッションチェンバーが当時で言えば爆発したと思っているし、４号プールは煙が上がっていると。とにかく早く逃がさなければいけないけれども、今度はより爆発のリスクが高いと思うから、外へ出ると次は 20～30 ですね。ここにその当時のものがあるのですけれども、20～30 ですと移動人数、人口がやたら増えると書いてあります。これは 30km 圏内だと 14 万になるのです。14 万になるということは、これは多分伊藤さんが御示唆をいただいたのでしょうけれども、20～30km を、より同心円が広くなって人数が多くなると、当時で言うと 20km までは行っていますね。20 まで行っていてここの同心が広がるとより人口が広くなるのです。

結果とすると、ここの人口を逃がすのに何日ぐらいかかるかという議論をしたら、多分伊藤さんはそのとき４～５日かかると言ったのです。このときははっきり覚えていますけれども、子ども、妊婦、お年寄り、それも入院しているお年寄り、ここから逃がさなければいけない。それのまずバスとか車の手配が要る。これはもう逆に言うとリスクを背負っているから自衛隊とか警察にお願いしなければいけない。そこから出して自分たちで逃げる人は逃げてもらうと。だけれども、結果として全員避難させるのにどのぐらいかかりますかと言ったら、多分早くて４～５日と言われたと思うのです。避難をしているオペレーションの最中に何らかの爆発や何らかの放射性物質がたくさん飛散するような状況になるけれども、そのときに避難をしてもらう方がいいのか、屋内退避で家の中にいてもらった方がいいのかという議論を散々しました。

結果として、外へ出てもらうと意に反してそのときに爆発とか何かが起こったら被曝する。屋内退避の方が被曝しないと。ましてや 20～30 は距離が長いからそこまでは飛ばないみたいな話を班目さんとか相変わらずするのです。私の記憶で言うと、班目さんからチェルノブイリは今でも 25km が立ち入り禁止内ですからみたいなことを言うのです。

それで結果として言うと、この炉の不安定な状況の中でいつ爆発するかわからないのだったら屋内退避にしようという判断をしたのだと記憶しています。ただ、当然これは自主避難できる人は自主避難してくださいというあれだったと思います。枝野さんの会見でも恐らく自分で逃げられる人は逃げてくださいと言っているはずです。
○質問者　もし御存じだったらなのですが、屋内退避になったのですけれども、屋内退避は基本的には長期間行うことは想定されないオペレーションであると防災指針の方にも書いてあるということで、当初、屋内退避、この３月 15 日にセットしたときには、これを長期間また４月になるまで続けるというような想定はしていないということですか。

○福山前副長官　想定はしていません。しかし、短くなるかどうかもわかりません。つまり、このときの判断は短いとか長いとか、申し訳ないですけれども、防災マニュアルとかほとんど関係ありません。極端な話で言うと、15日ですから、本当にサプレッションチェンバーが爆発したり東電が撤退したり4号プールから煙が上がったりしている状況ですから、そのことに対する被曝を回避するために屋内退避なので、そのときに短いのが想定されているというのは、1個気になるのは、原子力防災マニュアルに書いてある防災の指針の話は、チェルノブイリ型のぼんと爆発した一過性の爆発を前提にしているのです。つまり、その1か所ぼんと飛んでプルームが飛んであるところに行きますからというのが全体なのです。この状況は1、2、3、4がいつどこで何が起こるかわからない状況ですから、私たちは常に2つのリスクを抱えていました。1つは爆発のリスク。もう一つは、飛んでいる放射性物質による被曝のリスクなのです。

実はこの話は私も正直申し上げると後付けです。当時はまさに外へ出したら何かあったら被曝するのではないかというのが主たるあれだったので、現実の問題として言うと、屋内退避の判断をしました。屋内退避が結果として計画的避難も含めて長くなったことは、避難をされた方にとって本当に御迷惑をおかけしたと思っていますが、一方で、それぐらい私たちは爆発とかメルトダウンのリスクを引っ張るぐらい引っ張った状態です。だって、東電がメルトダウンを認めたのは5月でしたか。日米協議が始まったのは3月 20 日以降ですけれども、3月 20 以降でアメリカがメルトダウンしているはずだとさんざん意見の違いを言ったにもかかわらず、東電はまだメルトダウンしていないということをずっと言い続けています。つまり、その間じゅうは私たちは何かあったときに外での被曝を恐れるということをずっと思っていたのです。だから、いたずらに長く屋内退避を引っ張っていたのではないのです。炉の状況が安定をしてもう爆発やメルトダウンのリスクが無くなるまでは外へ出せないという中で実は屋内退避が結果として長引いたというのが実態です。これは後々で出てくる SPEEDI の議論に全部つながります。

○質問者　避難だけ先に残りを聞かせていただきたいのですけれども、3月 23 日に安全委員会が SPEEDI の試算結果を出してきて、これはいわゆる小児甲状腺透過線量で計ってきているのですけれども、100mSv にも達する地域が飯舘村や川俣村の方向に向かって伸びていると。これは避難範囲を変えた方がいいのではないかということで安全委員会が官邸に持ってきたということがあったのですけれども、これに関する御記憶等はありますか。

○福山前副長官　これは明快です。これは逆に言うと、久木田さんではなくて女の人。

○質問者　久住委員。

○福山前副長官　久住先生と班目委員長が青くなって、初めて SPEEDI で出ましたと持ってきました。何なんだこれはみたいな話なのですけれども、SPEEDI は私はもっと前から知っています。それは後でちゃんとお話をしますが、結果としてすぐに逃がせみたいなことを久住さんが言い出します。これは一体何か所のモニタリングの結果なんだといったら、実はたった4か所です。それも初めて出てきた SPEEDI の結果です。現実問題としては今、

屋内退避の状況をやっている最中です。その中で久住さんがヨウ素剤を投与した方がいいのではないかという議論をしました。そうしたら、これも後でゆっくり話しますが横にいた小佐古さんが何馬鹿なことを言っているのだと、ヨウ素剤はプルームが飛んできて何時間後に飲まなければ意味がなくて、もうプルームが飛んでから14～15日だと。もう23日の段階でヨウ素剤を飲んでもとっくのとうに遅いのだ、そんな意味のないことをするなみたいなことを総理やみんなの前で言い出します。

最初、久住先生の前で避難をさせろと言っていた班目委員長がだんだん声のトーンが小さくなります。本当にこれは危ないのかと、もう実はプルームは飛んで行っているのではないかと、では、逆に言うと外へ出したら余計被曝するのではないのと、屋内退避なのだから屋内退避のままの方がいいのではないのかと、本当にこのたった4か所のダストサンプリングで合理的な説明ができるのかという話をすると、どんどん久住先生も班目委員長も声が小さくなってきます。小佐古先生の声が大きくなって、お互いがけんかをし出します。[redacted]それで総理がもういいと、そちらはそちらで専門家でやってくれという話になって、実はそんな状況で、悪いですけれども、合理的な意思決定ができないという話の中で、もう専門家同士で1回整理してくれといって、それも私が引き受けますと言って、私が専門家同士の議論を文科省や保安院も含めて入れるということで2回それからやりました。これが実態の話です。

これは後々SPEEDIの問題にも関わってくるのでこのぐらいでやめますけれども、そのときの意思決定の流れはそういう流れです。

○質問者　もしそのとき話が出た内容で覚えていらっしゃったらですけれども、当時、こういう絵が出されていて、100mSvに達するんだということで説明されたみたいなのですが、なので避難させた方がいいのだと久住先生が言って、それに対して一方で100mSvから500mSvは屋内退避の基準とされていて、500を超えたときに避難を検討するということが指標として定まっているので。

○福山前副長官　それはICRPでしょう。

○質問者　はい。なので、仮に100だとしたところで外に出る避難をする必要がないのでしょうという話が当時出て。

○福山前副長官　それは小佐古さんから出ているのではないですか。

○質問者　久住さんは黙ってしまったという話があったのですが。

○福山前副長官　だから、もう先ほど言ったとおりです。

○質問者　そういう流れだったということですか。

○福山前副長官　はい。だけれども、どちらがいいのかわからないのです。ただ、私たちが思ったのは、外へ出して避難させるということは、その線量の高い状況で外へ出すということでしょう。今、屋内退避にいるのにわざわざ外へ出して被曝させるのかという話と、本当に早く外へ出さなければいけないという話がこの3人の専門家の話では意思決定できるような材料がないのです。ましてやSPEEDIはこのときのダストサンプリングの量とい

うのは4か所ですから、初めてSPEEDIを持ってきて大騒ぎになったわけです。後で話しますけれども、本当に小佐古さんも班目さんもSPEEDIに関しては[redacted]いきなり持ってきていきなり逃がせとかこの人たちは何を言っているのかという話なのです。お互いが学者同士で文句を言い合ってお互いの見解の違いでさもお互いが[redacted]だなみたいな話をして、もう総理がわかった、もう学者同士でやってくれみたいな話になって、結果としてそこは屋内退避のまま維持したというのが私の記憶です。

○質問者　あと数点なのですけれども、その後、3月31日以降、官房長官室でいわゆる計画的避難区域と緊急時避難準備区域の検討をして、これは福山副長官にも中心になって入っておられたと聞いておりまして、この計画的避難区域と緊急時避難準備区域については、初期の3月11～15日までの避難の決定と比べると、割といろいろ政務から指示を受けて事務方が作業してきたものに基づいて検討していたと聞いているのですけれども、まず新たな避難の考え方というのをこの時期にスタートさせた何か契機になるようなものというのはあったのでしょうか。

○福山前副長官　それはSPEEDIが3月23日と3月下旬から4月初めに空間線量のモニタリングの結果、アメリカから空間線量マップみたいなものが出てきていましたし、IAEAが3月の終わりに飯舘に入って1回もめ事を起こしていると思いますが、その話とか出てきましたし、一方でようやく3月の23、24日ぐらいからキリンの投入を始めとして、例のコンクリートポンプ車による注水がある種一定できるようになるわけです。現実に日米協議が3月21か22日から始まるのですけれども、私が正式に出したのが事前協議も含めて20日ぐらいからだと思いますが、日米協議の中でそれぞれの炉の状況について、関係する全省庁と日米の専門家と東電の間で毎日議論があります。その中でどの程度メルトダウンしているかしていないかの見解の相違はあるにしても、注水作業すれば一定の安定が保たれるという状況の中で、一定の炉がこうやって安定状況中で爆発や放射性物質の大量の飛散という状況がなければ、やっと屋内から出せるねと、出せるねという言葉は失礼ですけれども、避難していただけるねという状況の中で23、24日ぐらいから具体的にモニタリングの結果がやっと出てきたSPEEDIの状況などを基に避難のオペレーションをどうするか議論を始めたというのが実態です。

先ほど官房長官室と言われましたが、これは別に私がと申し上げるつもりはありませんが、事前の仕込みは[redacted]副長官室でやりました。それから中間検証にほとんど言及がない話で言うと、原子力生活被災者支援チームの話がほとんどありません。原子力生活被災者支援チームは、3月の終わりにできてから毎日やりました。毎日やってここにはほとんどすべての省庁が来ました。ここで大体、計画的避難区域、緊急時避難区域、後々による干渉地点、干渉区域、食品の暫定規制値の問題、汚泥の処理の問題、放射性廃棄物の問題等については全部事前の仕込みはここの生活支援チームのほぼ副長官副大臣会合、そこには全部役所の局長クラスが来ていましたけれども、私の部屋で仕込みをしました。これがほぼ3月の終わりから毎日やっていて、ここの仕込みの中で長官に意思決定を上げたと。た

だ、枝野官房長官と私はなるべく同じ情報を共有しようということを確認して合っていたので、私のところでやる報告を私が官房長官の部屋へ行って一遍に終わらせることも何回もありました。しかし、その前の仕込みで何回かかかっているものがあったので、現実に中間検証の中でこの原子力生活支援チームのことについてほとんど言及がないのと、日米協議についての言及はないのと、もう一つは、3月25、26日からですけれども、アメリカから放射線医療の専門家が来て、実はモニタリングとヨウ素剤の投入、幾つかの問題の論点について、医療の専門家とアメリカの専門家チームの会合を3日ぐらいやりました。ここで一定の方向性の提言とかが出ています。これは日米協議とは別枠でやったのですが、これも私が責任者をしました。このこともほとんど言及はありません。

もう一点言及がないのは、4月の頭に官邸の中に放射線医療の専門家の学者を集めて、10人ぐらいの専門家チームをほとんど常駐していただいて福島の情報を確認しながら、例えば子どもの例の20mSvやいろんな計画的避難区域をするときに、その10人に及ぶ放射線医療の専門家の人の意見を逐一聞きながらやっています。これは保安院や班目委員長、小佐古さんを始め、実はある一定の学者さんの言うことだけでは危ないという判断の中で幾つもラインをつくって、その中で意思決定をしていきました。そういうことに対しての言及は中間検証はほとんどないというのは、私なりには非常に違和感を覚えました。

現実には理由としてはそういう理由で3月の下旬の真ん中ぐらい、23、24、25日ぐらいから避難の新たなオペレーションに対する準備が始まったということです。

○質問者　原子力の被災者支援チームなのですが、この計画的避難区域と緊急時避難準備区域への関わりというのは、ちょっと聞いた話ではコンセプトづくりではなくて、むしろそれが決まってからの地元調整を主にやっていたと聞いたのです。

○福山前副長官　全然ナンセンスです。ここにありますか。これは実は計画的避難区域、事務方が持ってきたものを時系列になりますけれども、どんどん手が入って修正されています。現実にはこのプロセスの中で、先ほども申し上げた放射線医療の専門家の先生方に何度もこれでどうでしょうという確認をしながら、一方で枝野さんに確認を取りながらやっています。もう間違いなくここには政治が関与しました。逆に言うと役人だけでまかしておけないというのが私たちの中では最初のプロセスの中で十分あったので、そこはかなり綿密に政治がコミットしました。そのときに3月の終わりくらいからようやくSPEEDIが出てきて、これも全く全体像が見えないような出し方をしてきたので、これは細野さんが相当3月の終わりにいかりまくって、全部出せということでいろんなシミュレーションをしました。

風向きも一様ではないということは途中からよくわかったので、1年前の福島の気象条件と風向きを全部入れろと、これから先の風向きを全部想定してSPEEDIを回せと言って全部回させたりとか、そういったことをやってこの計画的避難区域のプロセスは入って、その後です。おっしゃられたように私は飯舘の菅野さんや川俣の古川町長と官邸で事前に会ったり、細野さんと松下副大臣とマスコミに知られないように事前に福島に内々入って、

それぞれ５時間、３時間ぐらいずつ飯舘と川俣と南相馬の桜井さんと話をして計画的避難区域の事前の説明をしに行ったり、その後、枝野さんに入ってもらったり、その後、正式な発表になってから、今度は私と平野さんと松下副大臣で飯舘、川俣の説明会に実際に私が足を運んで説明して、２時間ぐらいか３時間ぐらいずつ説明をさせていただいて、その後、何度も入ったりというのが地元調整で、それは勿論大変大きな重たいプロセスでしたけれども、実際の中身をつくるときもほとんど細野さんは私の副長官室に来て、当時は保安院やら原子力生活支援チームの主要メンバー、文科省含めて日々議論しながら彼らの持ってきたものをたたきながらやったというのが実態です。

○質問者　先ほどちょっとお話に出た放射線医療の専門家 10 人ほど４月上旬に集めていろいろ意見を聞きながらやっていったと。計画的避難区域というのは、20mSv を基準にしてそれを超えるところを避難区域と定めたのですけれども、その 20 の妥当性とかということも含めてこの専門家の人たちに。

○福山前副長官　勿論です。

○質問者　この医療専門家というのは官邸に。

○福山前副長官　官邸に置いたのですけれども、部屋がなかったので内閣府に一室設けてずっといてもらいました。ほとんど３人ぐらいずつずっと交代制で常駐していただいていて、非常にありがたかったです。それはメンバー表とか皆さん持っていますか。

○質問者　実はこの放射線医療専門家の話は今日初めてお聞きいたしまして。

○福山前副長官　そうですか。放射線医療専門家チームはこれがメンバーです。これは実はこの人たちはそれぞれの専門家です。ずっと官邸からこの人たちにリスクコミュニケーションしてメッセージを発してもらったのと、これが専門家グループ、これが先生方です。私が一応トップをやりました。例えばで言うと、計画的避難区域のところで言うと、これは４月１日か２日にスタートしています。この人たちに常にいろんなことを聞いて意思決手の材料にしました。

だから、このうちの先生何人かに聞いて、しょっちゅうボールが来ているというか、いろんな諮問みたいなのがあって、そこに答えをしたということは言っていただけると思います。

○質問者　わかりました。

○福山前副長官　これが日米の専門家でやったときのタスクフォースです。26 日。これは日米でやりました。その日米の後に別のものを立ち上げたのがそれです。

○質問者　日本側のメンバーということですか。

○福山前副長官　それは日本側です。アメリカ側はアメリカ側の医療の専門家が来てやりました。

○質問者　これは後でコピーを取らせていただいたもよろしいですか。

○福山前副長官　いいですよ。

○質問者　ありがとうございます。